

〔野生動物による造林木の新たな被害実態の解明に関する研究〕

## 散水チューブを加害する野生動物とその対策

新井一司・畑 尚子

(緑化森林科)

---

【要 約】立川庁舎の圃場において散水チューブを加害していたのは、タヌキである。同圃場にはイノシシなど大型哺乳類が生息していないため、電気柵を用いることなく、シンプルかつ維持を含めて低コストの柵により防除可能である。

---

### 【目 的】

立川庁舎の平坦な圃場(立川市富士見町)において、スギ、ヒノキのポット苗を育成していたところ、散水チューブ、配線などの灌水装置(サンホープ製)に切断などの被害(図1)が発生し、散水不能となった。そこで、この加害獣を特定し、防除対策を試みた。

### 【方 法】

2016年10月11日に圃場の被害地において切断された散水チューブの断片を置き、これに近づく野生動物をセンサーカメラ(SP108-J, Hyke)で捉え、動画モードで撮影し、加害獣を推定した。対策として、加害獣に最適と思われる柵を検討し、試作品を2017年3月22日に設置した。その後、継続して被害の有無、センサーカメラによる周囲の状況を撮影した。

### 【成果の概要】

1. センサーカメラには、2016年11月30日、切断された散水チューブを口に咥えたタヌキ(図2)が撮影されていたことから、加害獣はタヌキと推定された。なお、センサーカメラには、他にハクビシンとネコが撮影されていたが、いずれも散水チューブを口に咥えなかった。
2. この圃場は住宅地にあり、大型の哺乳類であるイノシシやニホンジカは生息していないと考えられる。そのため、柵はタヌキの侵入を阻止できればよく、できるだけシンプルな構造とし、維持管理を含めて低コストなものとした。高さ1.2mまで4mm目の防風ネット(図3, 表1)を用い、タヌキに噛みつかれないよう弛みなく周囲を張り巡らすデザインとした。また、地際からの野生動物による侵入を防ぐため、垂らし部として0.3m設けた。面積219㎡、外周60mの柵を設置後、柵内の散水チューブの被害は全くみられなかった。センサーカメラには、柵に対して立ち上がるタヌキ(図4)が撮影され、タヌキの侵入を阻止していた。電気柵を用いることなく、このシンプルな構造で2018年12月まで継続して防除されている。

### 【残された課題・成果の活用・留意点】

都内の育苗は山地ではなく主に青梅市周辺の平地で行われているため、同様の灌水装置を使用している生産者に周知する。また、農作地においても同様の被害が発生する可能性があるため、農業関係者にも広く情報提供する。

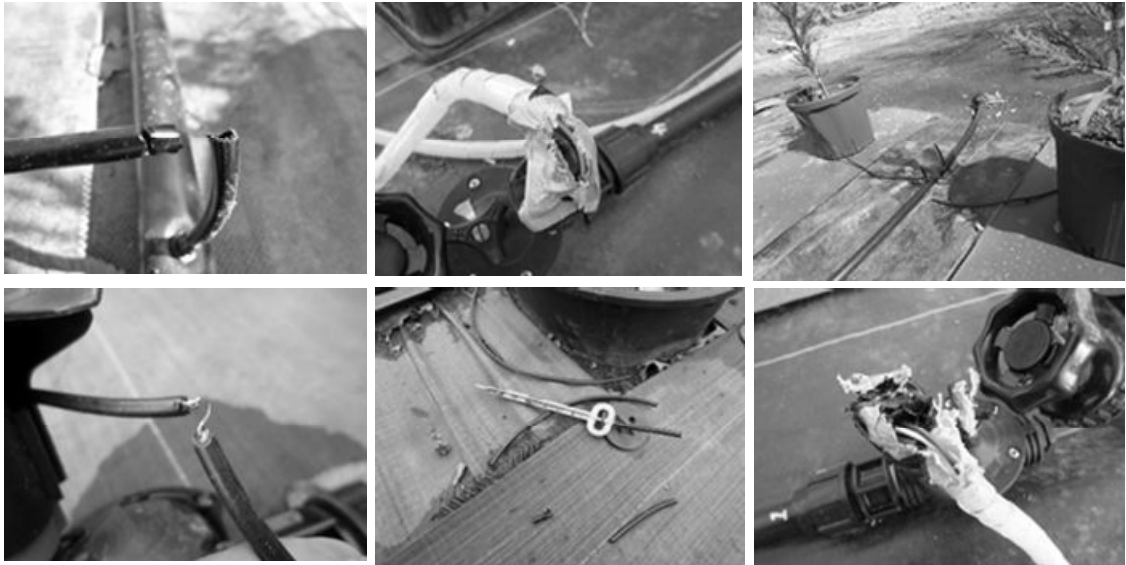


図1 散水チューブなど灌水装置の被害



図2 散水チューブを口に咥えたタヌキ

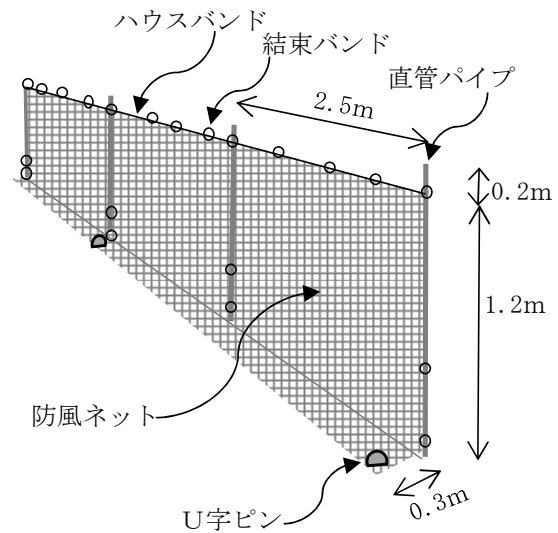


図3 タヌキ対策用柵の構造

表1 タヌキ対策用柵の資材  
(100mあたり)

防風ネット		
4mm目	幅1.5m×50m	2巻
直管パイプ		
径25.4mm	×1.8m	40本
ハウスバンド		
幅10mm	×200m	0.5巻
結束バンド		
幅3.6mm	×150mm	240本
U字ピン		
長さ200mm		20本



図4 柵に立ち上がるタヌキ